

滿鮮諸族の始祖神話に就いて(三)

—その境域性と歴史的意義の究明—

三 品 彰 夫

緒 言

目 次

第一章 卵生型神話 (前號)

第二章 獸祖型神話

第九項 獸祖要素

第十項 獸祖神話の實例

第十一項 獸祖要素の境域性とその意味 (以上本號)

第十二項 獸祖神話の宗教的基礎 (以下次號)

第十三項 人獸相婚

第三章 感精型神話

第四章 總 括

滿鮮諸族の始祖神話に就いて(三)

第二十七卷 第二號

八五

第二章 獸祖型神話

第九項 獸祖要素

朝鮮の始祖神話が含む卵生要素の歴史的聯關を求めて、吾人のたどり得た方向は、最初何人も豫想したであらう北方の滿蒙方面ではなく、實は南方はるかインドネシヤ方面への聯關であつたが、然らば朝鮮が接壤する滿蒙方面の諸族間の始祖神話は、その如何なる要素に於いて、朝鮮と如何なる關係にあるであらうか。この點で先づ注意される一つの神話要素は、本稿の最初に指摘して置いた獸祖神話である。獸祖神話はひとり滿蒙諸族に限られて居るのでは勿論なく、プレリー狼・海狸・猿などから人祖の出自したことを語るアメリカインディアンの各種神話をはじめ、廣く世界的に見られるところであるが、吾人はこゝで此種神話を一般的に考察せんとするのではなく、その範圍を朝鮮と近密な關係にある大陸方面に限定して、その間の諸民族の傳承する獸祖神話を取りあげ、その境域性の上に立つて、滿鮮古代の文化的聯關の一端を究明せんとするにある。而して獸祖神話は這般の目的に恰好な資料たり得るのであらう。先づ資料となるべき神話を例舉しよう。

第十項 獸祖神話の實例

第四十二例、烏孫の族祖傳説。

「烏孫王を昆莫と號す。昆莫の父難兜靡はもと大月氏と俱に祁連敦煌の間にある小國なり。大月氏攻めて難兜靡を

殺して其の地を奪ふ。人民匈奴に亡走す。子昆莫新に生れ、傳父布就翎侯抱き亡けて草中に置き、爲に食を求めて還るに、狼の之に乳するを見る。又鳥肉を銜へて其旁に翔べり。以て神となし、遂に持して匈奴に歸す。單子之を愛養し、壯なるに及んで、其の父の民衆を以て昆莫に與へ、兵に將たらしめしに、數々功あり。云々」(前漢書卷六十一、張騫列傳第五十一)

これは張騫が匈奴の間に在つた際(西紀前一三九—二九九年)傳聞した話として、歸朝後漢帝に報告したものであり、本稿で取扱つた狼祖傳説中最古の文獻資料たる點で注意すべきである。當時知られて居た鳥孫の故地は祁連敦煌の間にあつたと云ふが、その民族系統に關しては、インドゲルマン種となす説とトルコ系となす説とがあつて一致しない。白鳥庫吉博士の指摘された如く、彼等はトルコ系の言葉をして居たが、白鳥庫吉博士「鳥孫に就いての考」史學雜誌第十一、十二編)他方唐顏師古の「鳥孫於西域諸戎、其形最異、今之胡人、青眼赤須、狀類獼猴者、本其種也」と、鳥孫傳に注するところを承認するとすれば、彼等はインドゲルマン系の體質的特徴を示して居たとしなくてはならぬ。これらの點を綜合すれば、彼等はインドゲルマン系とトルコ系の混血ではなかつたか。それは兎に角、神話要素に就いて云へば、言葉と近密な關係を持つものなるが故に、その言語と共にトルコ系であつたと考へて太過あるまい。漢以後鳥孫の名は魏書にまで見えるが、その後は消息が絶えて居る。彼等が遊牧民であつたこと「隨書逐水草、與匈奴同俗、國多馬、富人至四五千匹」(前漢書卷九十六下、西域傳第六十六下鳥孫)と云へる如くである。

なほ右の所傳申傳父とあるは、顏師古注に「服虔曰傳父如傳母也」と云へる如く、母と見るのが原の形に近くはなからうか。

第四十三例、突厥の始祖神話。

「突厥は其の先西海の右に居て獨り部をなす、蓋し匈奴の別種なり、姓は阿史那氏、後隣國に破られ盡くその族を

滅ぼさる。一兒あり年まさし十歳、兵人その小を見て之を殺すに忍びず、乃ち足を削り其の臂を斷ち草澤の中に棄てしに、牝狼ありて肉を以て之に餌はす。長ずるに及んで狼と交合し遂に孕むあり、かの王この兒のなほあるを聞き重ね遣して之を殺さしむ、使者狼の側にあるを見て、併せて狼を殺さんと欲す。時にすなはち神物ありて狼を西海の東に投じ、高昌國の西北の山に落ちたり。山に洞穴あり、穴内平壤茂草、廻廻數百里、四面俱に山あり、狼その中に匿れて遂に十男を生む。十男の長外託の妻孕み、其後各々一姓となる、阿史那は即ちその一なり、最も賢なるもの遂に君長となる。故に牙門狼頭の讎を建て、本を忘れざるを示す。(北史卷九十九、列傳第八十七(突厥))

この外に「突厥の先は索國より出づ、匈奴の北にありて其部落の大人を阿謗歩と曰ふ、兄弟七十人、其一を伊質泥師都と云ひ狼の生むところなり」と云ふ異傳を傳へて居るが、何れも祖先を狼生とする點に變りはない。突厥は西紀六世紀の中葉にアルタイ山麓に興つたトルコ種族の國であり、支那史籍が匈奴の別種と推定して居るのは地域的に匈奴の故地に當るからであらう。彼等は「隨逐水草遷徙、以畜牧射獵爲事」て遊牧生活を營み、その全盛期には東は興安嶺方面の契丹族を逐ひ、西方ははるかペルシヤを壓する程の國力を張つて居た。

第四十四例、高車の始祖神話。

「其の先は匈奴の甥なり……俗に云ふ、匈奴の單于二女を生む、姿容甚だ美なり、國人皆以て神となす。單于曰く、我この女あり安んぞ人に配す可けんや、將に以て天に與へんと。乃ち國北無人の地に高臺を築き二女をその上に置きて曰く、請ふ天自らこれを迎へよと。三年を経て、其母これを迎へんと欲す。單于曰く、不可なり、未だ徹せざるの間のみと。復一年す、乃ち一老狼あり、晝夜臺を守りて嗥呼し、臺下を穿つて空穴となし、年を経て去ら

ず、其の小女曰く、吾父我をこゝにおき以て天に與んとす、而して今狼來れり、或は是れ神物にして天の然らしむるならん、將に下つて之に就かんと。其の姉大に驚きて曰く、此は是れ畜生なり、乃父母を辱しむるなかれと。妹、從はず、下つて狼の妻となつて子を産む。後遂に滋繁して國を成す。故に其の人好んで驛を引きて長歌し又狼の嗥ゆるに似たり。(北史卷九十八、列傳第八十六高車)

高車は五世紀の初葉から末葉にかけて外蒙アルタイ地方に亘つて存したトルコ種の國であり、前掲の突厥もその流れに屬するものである。彼等の民族系統に就いて「蒙古赤狄之餘種也、初號爲狄歷、北方以爲高車、丁零、其語略與匈奴同而時有小異」(同註)と云つて居るが、匈奴の民族系統が今日未決定である以上、この問題も將來に俟たねばならない。彼等は「其選從隨水草、衣皮食肉、牛羊畜產盡與匈奴同」(同註)とある如く代表的な遊牧生活を營んで居た。

第四十五例、蒙古の始祖神話。

「上天より命ありて生れたる蒼き狼ありき。(蒙古語)孛兒帖赤那」その妻なる慘白き牝鹿ありき。(蒙古語)蒙兀馬喇勒騰吉思(海又は大なる湖)を渡りて來ぬ。斡難木連(斡難河)の源に不兒罕合勒敦(不兒罕合勒敦)に營盤して、生れたる巴塔赤罕ありき(那珂通世博士譯註「成吉思汗實錄」)

右の元朝秘史の所傳を拉施特の蒙古史及び蒙古源流の所傳と比較するに、「波斯文の蒙古史、即ち世に所謂拉施特の書にては、蒙古種の起源を狼鹿配偶説に歸せずして、更に以前に蒙古族が他族と戦ひ敗れて、僅かに男女各二人を遺し、阿兒格乃蒙の山中に匿れたることを説けども、此の山中より出でたる蒙古人にて、最も知られたるは、孛兒帖赤那にして、其の數多き妻の内、長妻を鄂鞞馬特兒といふ、ことを載せたり。但しこゝには孛兒帖赤那、鄂鞞馬特兒を人名として、狼鹿相配とはせざれども、其人名は依然として、蒙古語の狼といふ赤那なる語、鹿といふ馬蘭勒の變形せる馬特兒を用ひたれば、傳説の二源に出でたること

は論ずる迄もなし。蒙古源流には此の男を布爾特齊諾として土伯特(西藏)の尼雅特齊博汗の七世の孫、色爾特齊博汗の子なりとし、女の名を郭魯瑪喇勒としたり。」と内藤虎次郎博士がその論文「蒙古開國の傳説」(讀史叢錄所收)に於いて説かれた如くである。彼等が成吉思汗に率ひられて世界的な活動をなしたことは説明を要しないことであり、またその發祥時代彼等が遊牧生活をなし、それに狩獵生活を兼ね營んで居たことは、成吉思汗傳の隨所に見えて居るところである。

第四十六例、羌族の所傳。

「羌の無弋爰劍は秦の厲公の時、秦の拘執する所となり以て奴隸となる。爰劍は何れの戎の別なるやを知らず。後亡歸するを得しも、秦人之を追ふや急、嶺穴中にかくれ免るゝを得たり。……其後子孫分別して各自種となり、隨つて之く所に任せ、或は參牛種となる、越焉羌是なり。或は白馬種となる、廣漠の羌是なり。或は參狼となる、武都の羌是なり。」(後漢書卷一百十七、西羌傳第七十七)

西羌の民族系統に就いては、これを西藏系とするのが通説の如くであるが、然らばその西藏族とは何かと云へば、甚だ漠然として居り、強ひて云へば、西藏族の主體をなすホル・Hor族なるものは匈奴系と考へられて居るが(青本文教館、西藏文化の新研究五〇―六一頁)、匈奴の民族系統が未決定の今日、羌族の所屬も亦分明とは云へまい。が少くとも蒙古種及びトルコ種の何れかに近密な關係を持つ部族であつたと考へてよからう。

西羌の參狼、白馬、靛牛などの種族名から、彼等がそれぞれ狼、馬、牛を族祖として居たとする推定は、既に内藤虎次郎博士が前掲論文に於いてなされたところであり、その他後漢書所載の西南の氏羌諸族の内にも、白狼・冉駹・白馬等の種族名が見えるが、何れも同様なことを推測せしめるものである。但しその名から想像する獸祖神話の内容が果して如何なるものであつたかは知る由もないが、その始祖たる爰劍が嶺穴中にかくれて免るゝを得たと云ふ點などから推して、さきの突厥のそれに類するも

第四十七例、蒙古族の傳説。

のでなかつたかを想像するものである。後漢代に於けるこれら諸部族の住地は「參狼在武都、勝兵數千人……犛牛白馬羌在蜀漢」(同註)とあれば、その大體を知り得る。生業的には遊牧を旨としたこと「所居無常、依隨水草、少五穀以產牧爲業」とあるが如し。

「そこに阿蘭媛なる彼等の母は云へり。……『夜ごとに光る黄色の人、房の天窓の戸口の明處より入りて、我が腹を摩りて、その光は腹の内に透るなりき。出づるには、日月の光にて、黄狗の如く爬ひて出づるなりき。輕率(送列蕙)に何ぞ言ふ、汝等これ(帖兀別兒)にて察れば明かに(忝迭克)彼の(光る人の子)は(皇天)騰格里の御子なるぞ。黒き(合喇)頭(帖里兀)の人に比べて(合流勒罕)何ぞ言ふ、汝等。合木渾合暢(普き君、すめらぎ、合木渾罕の複稱)とならば、民草は(合喇除思)そこに覺えんぞ』と云へり」(成吉思汗實錄)

右は蒙古の始祖より十世の孫である朮赤斡兒干の妻阿蘭蓋阿が夫の死後不勿合塔吉・不合利撒勒只・孛端察兒(蒙古黒)の三子を生んだが、その夫なくして生みたるわけをその子達に右の如く語り、且その皇天の子なるを教へた時の話である。この話は感精型に屬するものであるが、一面その光る黄色き人が「黄狗の如く爬ひ出づる」ところに、神の出現形相の「一が狗であつたことを語つて居り、さきの高車の天に捧げられた女が實際には神狼の妻となつた神話に共通する構想を持つものと云ふことが出来よう。なほポタニン Potanin の採收にかゝる蒙古族の始祖神話に「彼等の始祖が犬から生れた」(補足例二)とか、「木から生れて犬に養れた」(補足例二)とか云のがあるが (Holmberg, U., p. 502)、これらの例からしても、蒙古族の間に廣く犬祖傳説の存したことが知られる。後文でも説く如く、右の阿蘭蓋阿の話で、狗の存在が幾分明確性を缺いて居るのは、云はゞ感精型に移行する過程にあることを示して居るのである。

第四十八例、兀良哈ウラハの始祖傳説。

「昔し豆滿江邊の朝鮮部落の一女二十歳を起へて獨身なりしが、一日江畔に洗濯に赴きしに、水中より『五閔の犬』(Oryang-kai)出で來りしかば、女は氣絶し、稍あり氣付きしに、犬は側に死し居れり。女は不思議の因縁ありとて、此犬を砂中に埋め口外せざりしに、十ヶ月を経て子を産せり。頭髮黃にして犬の毛の如く眼大にして體遲し。女は窃に犬の種と知りしも、之を秘して五閔子と名づけしが、七八歳となりて……母は隠すこと能はずして窃に實を告げたり。この兒江畔に至り父の埋處を掘りて犬の形をなせる白骨を獲、之を名山に葬らんとて諸方を巡視せしに、或る山の池に曙氣の映するあり、其池中に小島あり、實に名地の相を具備せしかば、此小島に泳ぎ付きて地を掘りしに、石棺槨を搗て父の遺骨を埋めたり。これより家に歸りて母に仕へ、五閔犬と名乗り故郷を去り豆滿江のことならむ大河を渡り穀物の耕作さるゝ地方に移住し、妻を娶りて子孫種族繁殖せり。」(今西龍博士「朱蒙傳説及老獺雅傳説」)

右の異傳と見られるものがなほ二三今西龍博士によつて採録されて居るが、何れも兀良哈の始祖を犬と女との成婚によつて出生したことを語る點では同じである。兀良哈とは古く嚙娘改の名を以て遼代の初に見え、元の傳説時代より創業時代にかけてはバイカル湖方面よりオン河上流地方に廣く分布して居た部族がこの名を以て呼ばれ、明代には今の東蒙古の北半部即ち西は興安嶺から東は哈爾濱長春の平野に亘る地域に住した有力部族で、明國の北族政策上重要視されて居たが、清朝の興るに及んで忽然とその名を没した。一方朝鮮の文獻では高麗末から李朝中葉にかけて二百數十年の長期に亘つて、半島政廳と兀良哈の族名を以て交渉して居る部族があり、その根據は滿洲東境今日の開島方面にあつた如くであり、右の神話はこの方面の兀良哈族の所傳

である。斯の如く兀良哈なる名を以て呼ばれた部族の住地は甚だしく廣範圍に亘つて居り、それが果して同一種であつたか否かは大いに疑問である。最初は蒙古系の一種族を呼んだ名であることは確かであるが、その名が後に東滿洲方面にまで及ぶに至つた事情には次の二つの理由があらう。即ち元來部族の稱呼なるものは必ずしも ethnological なものでなく、可なり流用性に富むものなるが故に、一つの名が廣く他種族の上にも及ぼされて行く場合が少くない、次に量的には少數であつたとしても移住と混血との結果、その名が廣く及ぶ場合がある、の二者である。その何れに原因はあらうと、右の神話を傳承せる兀良哈なる部族は、ethnologically に云つて、滿洲族、特にツングース系文化特質を多く保有せる滿洲族であると考へて大過なからう。彼等の生活形態は生女眞のそれと見てよく、狩獵及び河川漁業が主なる生業であり、未だ原始産業の域を出でざるものであつた。

第四十九例、間島滿洲人の始祖神話。

「昔し黃帝軒轅氏の最愛の一女あり、其婿を擇むが爲に、繩を以て作りたる太鼓を門前に懸けて『若し此太鼓を打ち其聲が家内まで達せし者あらば之を婿にせんと公告せり。或日鼓音あり、出で見れば狗之を打ちしなり。更に之を打ちしめしに狗は兩足を舉げて打ちしに、皮太鼓同様の音を出せしを以て、約の如く其女を狗に與へたり。狗は女を伴ひ去り、晝は狗となり夜は美少年に化身し、言語應對人と異なることなし。或日狗妻に語て曰く、明夜は人形を完成するために房内に在りて固く戸閉すべし、房内に苦痛の聲あるも、決して窺ふこと勿れと。翌夜果して房内に苦痛の聲高かりしかば、妻約を忘れて窺ひしに、狗が皮毛を脱ぎて人形を殆ど完成し、僅に頭上にのみ毛皮を殘せる際なりしが、妻窺ひ見しよりモハヤ之を脱すること能はざるに至れり。今の滿洲人は此者の後裔なるが故に頭上に長髮を殘して標とす。』(今西龍博士「同右」)

なほこの異傳と思はれるものが任賢宰氏が「朝鮮民俗」第三號誌上で紹介されて居る。

第五十例、滿洲の馴鹿ツングース Reindeer Tungus の始祖神話。

「牝犬あり、天より天降り來れる七十餘りの老翁の相せる靈人とまじはりて孕めり。かくて evenki 卽ち彼等の同族は生れ出じたり。」〔Shirokogoroff, S. M., [b], p. 130〕

滿洲馴鹿ツングース族は滿洲の西北部 Bysrain, Albazka 諸河の流域に占居せる北方ツングース系の民族であり、馴鹿を牧養するところからかく呼ばれて居り、彼等は evenki と自稱して居る。彼等の傳へるところによれば、西紀一八三五年ヤクーツク方面より移動して現在地域に占居したと云ふ。(Shirokogoroff, S. M., (a), p. 67-8.)

前掲第二十例、徐偃王の出自傳説

徐偃王の出自傳説はさきに卵生要素を含む一例として掲出済みのものであるが、その所傳の内水濱に棄てられた卵子を鵝養(後倉)と呼ばれた犬が拾得する點は、再度こゝで注意されてよい要素である。そうして犬が拾つて來た卵を獨孤の母が孵成せしめて育てることになつて居るが、この場合、犬と母とは卵生の子に對して等しくオヤとしての地位にあると云ひ得る。

第五十一例、契瓠蠻の始祖神話。

「昔高辛氏に犬戎の寇あり、帝その侵暴を患へ、征伐して剋たず、乃ち天下の有能を訪募して、犬戎の將吳將軍の頭を得たる者には、黄金鎰を以て購ひ、萬家を邑とし又妻は少女を以てすべしと。時に帝狗を畜ふるあり、其毛五采、名づけて契瓠と曰ふ。下令の後契瓠遂に人頭を銜へて闕下に造る。群臣怪みて之を診るに乃ち吳將軍の首なり。帝大に喜び計るに、契瓠は女を以て妻とすべからず、又封爵の道なし、議して報あらんと欲し、未だ宣ぶる所を知

らず。女これを聞き、帝皇の下令違信すべからずとなし、因つて行かんことを請ふ。帝已むを得ず、乃ち女を以て槃瓠に配す。槃瓠女を得て負ひて走り南山に入り、石室の中に止まる。處る所險絶にして人至らず、是に於て女衣裳を解き去りて僕鑿の結びを爲し獨力の衣を着く。帝之を悲み、使を遣して尋ね求めしむ。輒ち風雨震晦に曹ひ使者進むを得ず。三年を経て子を生むこと十二人六男六女なり。槃瓠死せし後は因りて自ら相夫妻とし、木皮を織績し染むるに草實を以てし、五色の衣服を好み、製裁皆尾形あり、其母後に歸り狀を以て帝に白し、是に於いて諸子を迎致せしむ。衣裳は斑蘭、語言は侏離、好みて山壑に入り平曠を樂ます。帝其意に順ひ、賜ふに名山廣澤を以てす。其後滋蔓し號し蠻夷と曰ひ、外癡内黠、土を安んじ旧を重ね。……今の長沙、武陵蠻は是なり。」(後漢書、卷一百十六、南蠻西南夷傳第七十六)

この槃瓠系の種族に就いて搜神記(百子全書本、卷十四)は「今卽梁漢巴蜀武陵長沙廬江郡夷是也……世稱赤髀橫裙盤瓠子孫」とその民族誌的特徴を附記して居る。この赤髀橫裙は右の「五色の衣服を好み、製裁皆尾形あり」てふ所傳に應ずるものであり Liu (劉?) 氏はこの種系統の衣服が印度支那及びビルマ方面の諸族間に現存することを指摘し、なほ又右所傳の「僕鑿の結びを爲し、獨力の衣を著く」てふ玉姬の服裝——唐章懷太子は「僕鑿、獨力皆未詳」と注して居るが——にも言及し、この僕鑿 *pe chien* 獨力 *fu li* がシャム語、ビルマ語によつて始めて解し得るとして居る (Liu, p. 368, 3)。この盤瓠種たる武陵蠻が、今日の東に於いては浙江福建方面から、南に於いては印度支那方面の諸住民と、或る程度本末の關係の存するであらうことは推定して大過なからう。

補足例一。なほこの傳のはじめに見える犬戎てふ部族的稱呼にも吾人の關心を引くものがある。即ち犬戎の名が犬祖傳説を豫想せしめると共に、古くから、例へば山海經に左の如き所傳が見えて居るのである。

「大荒之中、有山名曰融父之山、順水入焉、有人名曰犬戎、黃帝生苗龍、苗龍生融吾、融吾生弄明、弄明生白犬、白犬有牝牡、是爲犬戎」(山海經大荒北經)

「西北海外流沙之東……有犬戎國、有神人、人面獸身、名曰犬戎」(同)

即ちこゝでは犬戎は黃帝の後なる白犬であるとされ、又人面獸身の神人と傳へられて居る。山海經のこの部分は先秦のものとして居り、若しそこに犬戎族に關する民族誌的資料としての價值が認められるとすれば、恐らくそれは、犬戎が白犬乃至は人面獸身の聖獸を族祖として居たことを語るものとして大過あるまい。

犬戎の住地は漢族の西北に接して居り、周祖西伯、周の穆王・懿王など屢々之を討伐したのは著石である。その民族系に就いては一般に西藏種と推定されて居るが、さきの西羌の場合と同じく、云ふところの西藏種とは何ぞやの問題が残るであらう。

第五十二例、福建浙江地方の Shaka の族祖神話。

「往古 Bulko と云へる王あつて他の王と大いに戦ひしも、その兵足らずして敵に勝つ能はざりければ、若し敵王の頭を取り來るものあらば、何人にも彼が姫を與ふべしと布告せり。王の犬これを聞き、敵地に赴きその陣營に入り、敵の頭を咬み切りて持ち歸りぬ。Bulko 敵の頭を見て狂喜し、その功績の故を以て、犬に報ゆるに高き位を授け、よき食物と小屋とを與ふべきを命ぜり。されど犬少しも喜ばず、血したる頭を啣へて王姫の部屋に走り入りて更に出づべくも見えざりけり。Bulko やその誓約を想ひ出せしも、『汝は犬なる故に』とて婦と婚すること適はざるを諭したり。こゝに犬その頭を床に落して云ひけるは、我を鐘の下に入れ置くこと四十九日、且その間何人にも内を窺はしむる勿れと。その云へる如くなされしが、人々飢の爲に犬必ず死せりと想ひて、四十八日目に鐘を

取除きぬ。しかるにさきに犬の在りしところに一人の男子あるを見しが、人に變じて未だ全からず、頭はなほ犬にありけり。Bukoo 誓約は守る可しとて、この犬頭の夫に姫を興へぬ。人々この姫を犬頭姫と呼びたり。姫その犬頭の夫を恥じて遠くに去り行き森の中に住めり。姫夫の顔見るをいとひ、髪を頭の頂にゆひ、それに赤き布を付し、夫の近づく時は、その布を降し、面を掩ひて夫を見るを避けたり。姫三人の子を持ち Bukoo 各々 Lui, Pan, Lan の名を興へぬ」(Lin, p. 362-3.)

第五十三例、福建地方の族祖神話。

「往古或る國王あり、隣國の侵入に遇ひしかば、この國難を救ふものあらば、三人の王姫の内最も美なるもの一人を興ふべしと布告せり。一匹の犬これを讀み、それを取り、啣へて宮廷に至り、その褒賞を勝ち獲んことの許を乞ひたり。許しを得し犬は海を渡り行きて敵の王廷に至れり。敵王は大酒飲みにて酔ひしれてありければ、犬その頭を咬み切り、風神の助を得て無事海を渡り歸り宮廷に着きぬ。彼國王の前に叩頭して敵の頭を捧げ、その褒賞を乞へり。取り敢えず人々犬に諭して、才藝豊かなる他の一美女を受けしめんとせしも、彼それを肯ぜざりければ、三人の王姫を連れ來り衣の裾を咬みてその一人を選ばしめたり。かくて彼は我七日の内に人に變ぜんと云ひて、鐘の下にかくすことを姫達に命ぜり。その云へる如くなされしが、皇帝いぶかしく思ひて、六日目に鐘を上げしめしかの犬頭部のみ残りて、他はすべて人の姿に變じてあれり。再び鐘をおろし置くに七日の後に全き人間となれり。この人即ち Tsiü の祖先なり」(op. cit. p. 363.)

本例と第五十二例とは共に近代の探訪にかゝるものにして、内第五十二例は Liu 氏自身の採取らしく、本例は Buxton, L. H. D. の著 "The Eastern Rod." London, 1924 よりの同氏の引用するところである。地域的にも同一地方に属して居り、この二者が同一傳承の異傳なることは明らかであるが、その内容から考へて、第五十二例の方が、元の形に近い様に感じられる。

第五十四例、ブリヤート族 Buriat の族祖神話。

「ブリヤート族の祖先は天から降つて来て、野猪に養はれたものである。」(Holmberg, U., p. 503.)

なほ別には、(補足例一) Khurnusta の娘が原因不明で孕み、山羊の姿で地上に降つて来て二人の息と一人の娘を産んだとも傳へて居る (Ibid.)。

第五十五例、キルギス族 Kirghis の族祖神話。

「キルギス族は野猪から生れたと自ら信じて居り、このことの故に、彼等は豚肉を食はない。」(op. cit. p. 502)

第五十六例、キルギス族の族祖神話。

「ヂンギス汗の子がコビで野猪と一緒に暮して居たが、やがてその野猪は彼の子を澤山生んだ。かくてキルギス人などの大民族が生じたのである。」(Ibid.)

右の四例はホルムベルク Holmberg, Uno, がボタニンの著 Pataniin, G. N. "Očerki severozapadnoy Mongolii" より引用するところであるが、原著を利用し得ない筆者は、それが神話的な構想に於いて詳しく語られて居たものか、或は單に始祖信仰として右の程度に傳へられて居たものか分明でない。ブリヤート族は次例に略説する如く若干ツングースと混血して居る蒙古系の種族であり、キルギス人はトルコ族系の種族である。

第五十七例、契丹族の傳説。

「一主あり號して嗚作喝一呵と曰ふ。野猪の頭を戴き猪皮を披し、穹廬の中に居る。事あれば則ち出で、退いて復穹廬に隠入すこと故の如し。後困りて其妻その猪を竊しかば、遂に其夫を失ひ、ゆく所を知らず」(契丹國志、契丹國初興本末條)。

右は始祖神話の形式を以て語られて居ないが、かの白馬灰牛の始祖神話(第六十六例)について、部族の傳承として契丹國志が収録して居るもので、恐らくその元は一種の族祖神話であつたと推定して大過あるまい。

第五十八例、ブリヤート族の始祖神話。

「バイカルの南に Taizhi-Khan と呼ぶ一王者ありて一匹の斑牛を持てり。この牛殊の外巨大にて力また強ければ、世の中に我が牛の強さを試し得るものあらば來り試みよ、と誇り居たり。牛の神 Bukha-Nojon 青灰色の牛となりて、斑牛にいとまんとて Taizhi-Khan の國に來れり。彼晝間は牛の姿にて角力すれど、夜になれば美しき若者となりて Taizhi-Khan の娘と情を交へけるに、やがてその娘懷妊して Bukha-Nojon に程なく子の生れる由を告げたり。こゝに Bukha-Nojon 彼女の胃の中よりその子を割き取りて、己が角と共にバイカルに投げ入れたり。斑牛を打ち負したる後 Bukha-Nojon は湖を泳ぎ渡りて岸邊にかの子を見出して養ひ始めぬ。かくて後一人の巫女青灰色の牡牛に授乳されある子供を見出して拾ひ取りて Bulagat と名付けたり。この Bulagat の二子 Kohori 及び Buriat 二氏の祖となり、これに關し巫女達は彼等が『青灰牛の休みし處』より出自せしことを歌へり。なほ

Bulagot はバイカルの汀にて今一人の祖先なる Ekerit なる者と友となりしが、この者はベーボット魚 (Lota lota) を父とし、岸邊を母として生れ出しものと云く。 (Holmberg, U., p. 502-3)

ブリヤート人は蒙古種に屬し、現在バイカル湖の地域に居り、人口は二八五九九と計上されて居る。ブリヤート族は十三世紀の初葉アムール河上流域に占居するに至つたが、その後西遷してバイカル湖方面の住地に移つた (Caplicka, M. A., p. 20-2. Pittard, E. p. 376)。かうした移動を通じてツングース諸族との間に混血が行はれた様であるが、然し今日なほ蒙古民族文化を古い形相に於いて保持して居ると考へて大過あるまい。

第五十九例、蒙古族の始祖神話。

「蒙古の汗達戦ひ盡して只一人の女のみ生き残り。この女牝牛に婚ひて二人の子を生み、この子より蒙古人はすべて出でしなり」(Holmberg, U., p. 502.)

なほ異傳には女が牝牛の子を生んだこと、その子が四つ足で歩いたこと、そうして前肢を切り落されて、この蒙古の始祖は始めて人の様に暮し、草の代りに肉を食ふに至つたことを物語つて居る。(同)

第六十例、契丹族始祖神話。

「相傳ふ、神人あり白馬に乗りて馬孟山より土河に浮んで東す、天女あり青牛車に駕し平地松林より潢河に泛んで下る。木葉山に至りて二水合流し、相遇して配遇となり、八子を生む。その後族屬漸く盛ん、分れて八部となる。行軍の毎に及び春秋の時には、祭るに必ず白馬青牛を用ひ、本を忘れざるを示すと云ふ」(遼史卷三七、地理志永州條)。

大同小異の傳が東齋記事・契丹國志・東都事略・燼餘錄等にも記載されて居り(田村實造氏「唐代に於ける契丹族の研究」滿蒙史論叢第一) 神女に就いては多く「一女鴛灰半」と云つて居る。

この神話を傳承して居た當時の契丹族は、今日のシラムレン以南の地域に遊牧生活を營んで居た。契丹族の民族系統に就いては古來異説が少くないが、白鳥庫吉博士の「契丹民族が如何なる人種に屬せしかは、至難の問題にして、今日に至るまで未だ之を充分に解したるものあるを聞かず、然し支那の北部に據れる大民族は常に Tunguse, Mongol, Turk の三種族の何れかに屬すべしとは、何人も期待するところなるべし。然れども此民族の Turk 種にあらざるは、余輩の蒐集せる契丹語に純然たる Turk 語の存せざるにても知るべく……。契丹既に Turk 種にあらざれば Tunguse 種或は蒙古種なるべく、然らざれば此二種の混合ならざるべからず」と云ひ、進んで言語方面より蒙古通古斯混合種なることを主張されて居るに従ふ可きであらう(東胡民族考、第十四回)。

第十一項 獸祖要素の境域性とその意味

上掲の諸例は何れも狼はじめ特定の動物が、部族なり氏族なりの族祖的存在として神話されて居る點に共通性を持つものである。掲出された例數は僅か二十餘に過ぎず、これを以てしては總括的結論を導き出すに不充分であるが、事例の不足は將來の補添に俟つとして、古代滿鮮民族の始祖神話の考察てふ本稿の目的に對する補助的論證の範圍に於いて論考を進めて行かう。さて右の諸例を地域的及び民族的に概觀するに、次の如き分布状態が先づ吾人の注意をひく。

突厥系諸族のもの——第四十二例(鳥孫) 第四十三例(突厥) 第四十四例(高車) 第四十五例補足例一(アルタイ)
第四十六例(羌) 第五十五例(キルギス) 第五十六例(キルギス)——計七個例

蒙古系諸族のもの——第四十五例(蒙古) 同補足例二(蒙古) 第四十七例(蒙古) 同補足例一(蒙古) 同補足例二

(蒙古) 第五十一例補足例一(大戎) 第五十四例(ブリヤート) 第五十七例(契丹) 第五十八例(ブリヤート)
 第五十九例(蒙古) 第六十例(契丹) —— 計十一個例

ツングース系諸族のもの —— 第四十八例(兀良哈) 第四十九例(滿洲族) 第五十例(馴鹿ツングース) —— 計三個例
 南蠻系諸族のもの —— 第五十一例(黎瓠) 第五十二例(福建) 第五十三例(同) —— 計三個例

(なほ右の民族系何れに屬せしむべきか決定し難いものに徐偃王の例があるが、若し強ひて云へば、南蠻系の色彩が比較的濃
 いものと推定してよからう。)

右の如く分類された四群の内、トルコ系・蒙古系及びツングース系の三群は、地域的にも民族的にも甚だ近密な關係にある諸族にして、特にツングース系と云つても右の諸族は蒙古と接する地域のツングース族に限られて居るのであるから、この三群を一まとめにして滿蒙境域に於ける民族群と見てよからう。この境域に對して、漢族をその中間に介在せしめて、南蠻境域とでも稱すべきものが考へられるが、朝鮮との關係に於いて問題となるのは、云ふまでもなく滿蒙境域である。上掲の諸神話は、朝鮮及びそれと關係深い滿蒙諸族に特に注意して、獸祖要素を含む始祖神話を檢出したのであつたが、不思議にも朝鮮古代部族の間に於いてはこの種のもの一つも發見し得なかつたことは注意に値する。勿論始祖神話ではなく、民間の怪談風のものとしては、例へば某郡守の夫人がコムトツクと云ふ猪に似た怪物と交つて崔致遠を生んだとか、主人の留守に年を経た家鼠が主人に化けて妻と交つたと云ふ類のもの(任督宰氏「朝鮮の異類交婚譚」朝鮮民俗第三號)は朝鮮にも語られてゐるが、これらの怪談類はこゝに取り上げべき筋のもの

ではない。

かく滿蒙境域に於いて見出された二十個餘の例に對して、この皆無てふ事實は、確かに論究すべき一つの問題を提供するものと云はなくてはならぬ。而してそれは、さきの卵生要素の考察に於いて、該當要素が朝鮮には存して北隣の滿蒙に見出し得なかつた事實と正しく相對立する現象とも云ふべく、今始祖神話のこの二要素に就いてのみ言ふならば滿蒙は獸祖型神話の繁榮して居る境域であり、朝鮮の卵生型神話に對して際立つた對立を示して居るのである。即ちこの限りに云へば、朝鮮と滿蒙とは、古代文化の一つの面に於いて一如的に聯關するものでなく、寧ろ截然と分離する面を持つと云ひ得るのであるが、果して然りとするならば、滿蒙の史的聯關を常識として居るものにとつては、全く奇異の感なきを得ない。

古く滿洲方面より半島内への民族移動が絶えず行はれたことは、史記・三國志はじめの東夷諸傳の明諒に傳へて居るところであり、考古學的方面の資料も亦同じく大陸文化の流入を實證しつゝある。言語學上の最近の妥當な結論も朝鮮語をウラル・アルタイ系に關係深きを教えて居り、従つて民族的にも北方との聯關を承認せしめるに充分である。一言にして之を云へば、滿蒙の民族的文化的交流の率は甚だ大なりと云はねばならぬ。然るに問題の獸祖神話要素に限り、ひとり滿蒙に榮えて半島には入らず、その東方の分布限界をこの半島の境外に持つて居るとすれば、この事實は如何に説明さるべきであらうか。こゝに吾人は、この種獸祖要素が、他の文化要素の如く半島内に入り得ない特異な性質を持つて居たと考へるより外なく、即ちそれは獸祖要素の本質にかゝはる問題として取扱はるべきを豫想

するのである。このことは逆に云へば、滿蒙は獸祖神話の榮えるに適した地であり、朝鮮は然らざる土地となすべきであり、こゝに問題は神話から離れて、滿蒙と朝鮮の環境的相異てふ問題に移つて行く。

朝鮮と滿蒙との文化をそれ〴〵に規定する諸要因の内、その基本的なるものとして第一に指摘すべきは、兩者の生活形態付つけるところの風土的特徴である。即ちそれ〴〵の風土的规定のもとに、蒙古諸族は遊牧生活を營み、半島の諸族は古來農耕を唯一の生業とし、滿洲諸族はその文化の度と住地の條件に應じて、狩獵・牧畜・農耕の内一乃至二三を兼ね營むものであつたが、古代滿洲族は總じて云へば、狩獵を主とし牧畜を兼ねたものと云つてよからう。かく朝鮮は農耕的であり、滿蒙は遊牧的狩獵的である點で、兩者は接壤しつゝ、しかも際立つた對立を示して居る。後漢書や魏志の東夷傳を、この點で比較して一讀すれば、這般の對立は甚だ明瞭であるし、又古代にのみ限らず、中世にあつても、一例せば、高麗史世家の「(顯宗十二年)春正月……黑水靺鞨酋長阿頭陀弗等來獻馬及弓矢……三月……乙酉西女眞毛逸羅那忽羅等來獻土馬貂鼠皮」などある記事——この種記事は枚舉に堪えない程だが——が示して居る貢獻貿易の品目によつても、そこに狩獵的物産と農耕的生産品との有無相通が見られる。またたとへ滿蒙民族が朝鮮内に多く流入移住した場合に於いても、やがては彼等は半島の生活型態に化せられるのが常であり、却つて彼等は母族たる滿蒙のそれに對立するものとなり了るのであつて、體質的特徴や言語的聯關が如何であらうと、結局彼等は滿蒙的なるものを捨て、朝鮮的なるものを荷ふより外はないのである。この事實こそ、民族的關係を超越して滿蒙と朝鮮とを對立せしめて來たものであつた。こゝに問題にして居る一つの神話要素の對立の如きも、兩者の歴史的

關係には拘らない現象であり、云はゞ環境的相違及び文化の pattern が特殊な文化特質の交流を拒んだのである。デイクソンはその蓋し文化の構成の中で、文化特質がその種類により、相異なる環境と文化形態の間に於いて傳播率を異にせることを指摘し、「物質的諸特質は、全般的に云つて最も易容に傳播し、且變化を受けること僅少なるを常とする。宗教的諸特質は恐らく傳播の容易さに於いてその次に來るものにして、たゞ時には、變改を受けることがないではないが、大抵はそのまゝ新文化の内に攝容される。社會的諸特質にあつては、その傳播性の最も乏しきものである。」 Dixon, L. [a], p. 112.) と述べて居るが、滿鮮の間に於ける考古學的遺物の聯關に比べ、獸祖神話要素の非聯關的なる所以は、正しく後者が宗教的社會的文化的文化特質なることに歸因するものと云へよう。

獸祖神話の滿鮮に於ける境域的限定を、右の如く解し得るとすれば、そのことよりこの神話要素が、本質的に滿蒙の生活形態と結び付くことの淺からざるを豫想せしめるものであり、即ちそれは滿蒙の狩獵的牧畜的生活形態に即してあるところの宗教的社會的特質の一であつたと云へよう。この點は前述の卵生要素と大いにその趣を異にしてゐる。即ち卵生要素は單なる神話上の一個の觀念としてのみ存し、部族の生活形態就中その宗教儀禮とは近密な關係を持つものでなかつた。従つてその傳播は、部族の生活形態などに障られること少く、民族の移動乃至は接觸によつて、行はれ易すかつたと考へられ、事實は前章に於いて述べたが如くである。斯くその文化的機能に於いて、卵生要素と獸祖要素とは相異するものなるが故に、同じく始祖神話の考究と云つても、おのづからその取扱ひの方法が異なるべく即ち卵生神話にあつては卵生觀念をその觀念的な發展形相によつて分類して理解し來たのであつたが、獸祖神話に於

いては、部族の生活形態に即し、他の宗教的社會的特質と聯關せしめつゝ考察して行かねばならない。されば族祖として神話されて居る動物が、それらの種類によつて、彼等の生活と如何なる關係に於いてあつたか、と云ふことなども、卵生素では考へる要のなかつた方面であるが、獸祖神話の場合には、先づ注意してかゝらねばならない點であらう。そこで祖獸の種類に就いて分類を試みると次の如くである。

狼。 第四十二例(烏孫) 第四十三例(突厥) 第四十四例(高車) 第四十五例(蒙古) 第四十五例補足例一(アル

タイ) 同補足例二(フリヤート) 第四十六例(羌) ——計七個例

(右の内第四十四例及びその補足例では狼に對して鹿が配せられて居る)

狗。(犬) 第四十七例(蒙古) 第四十七例補足例一(蒙古) 同補足例二(蒙古) 第四十八例(元良哈) 第四十九例(滿

洲) 第五十例(馴鹿ツングース) 第二十例(徐) 第五十一例(藥製) 同補足例一(犬戎) 第五十二例(福建) 第

五十三例(福建) ——計十二個例

猪。 第五十四例(フリヤート) 第五十五例(キルギス) 第五十六例(キルギス) 第五十七例(契丹) ——計四個例

牛。 第四十六例(羌) 第五十八例(フリヤート) 第五十九例(蒙古) 第六十例(契丹) ——計四個例

馬。 第四十五例(羌) 第六十例(契丹) ——計二個例

山羊。 第五十四例補足例一(フリヤート) ——計一個例

祖獸の種類から云へば、狼、狗(犬)、猪、牛、馬、山羊などであり、量的に云つて狼と狗(犬)とが遙か優位を占め

て居る。これらの動物の内、例数の多い狼と(狗)犬に就いて略考し、猪牛馬に就いては、本稿とは觀點を異にした立場から別稿に於いて考察することにした。なほ上掲諸例に含まれて居ないものに、獺を祖とする清祖の神話などがあるがこれもこゝでは問題の外において置かう。

狼が人畜に加へる危害から恐れられ、やがて神默的に扱はれることは、廣く世界的に見られるところであり、國語のオホカミもさうしたところに呼ばれた名であり、又中欧やスカンヂナビヤでは狼は實際の名では呼ばれず “Silent One” 或は “Wood-runner” と云はれ、Iupa (a she-wolf) に對する古代ラテンの婉曲名は “Silvia” 即ち “the forestwoman” であり、かのロムルス兄弟の母の名も、これから來て居る (Krappe, A. H.; p. 25)。何れも狼に對する恐怖心からの名である。農耕民族の間にあつても、既にフレイザーがその葦、穀物及び野生植物の精靈に於いて例示して居る如く、狼が狐など、共に靈の出現形相の一として信仰されてゐる例もあるが、然し狼に對する關心の最大なるものは、牧畜民族であること云ふまでもない。牧畜民族のとつて最も恐るべき敵は狼にして、例へば馴鹿を牧養するツングース族の間で、秋冬の間、狼の爲に失はれる家畜の數は、全頭數の五割に達すると云ふ事實 (Shirokogozoff,) からも思ひ半ばに過ぐるものがあらう。牧養者にとつてこの怖るべき強敵は、恰も農耕者にとつての旱天のそれにも比すべく、かくて狼は彼等の神としての地位につく。古代のギリシヤに於ける代表的な牧畜の守護神たるアポロン Apollon が、一面パウサニヤス (Pausanias) の記して居る如く Apollo Lukios 即ち「狼のアポロ」として祀られて居ると同時に、他面ソフォクレスは「この神を、狼を殺すもの」と呼んで居る(註一)。この神の正反する二面に就いてラン

グは「動物が神と近密に結合される時、古代人は無頓着にその神をさうした動物の保護者とも殺害者とも呼んで、この事實を説明するのが常である」(Lang, A.; vol. 1)と述べて、原隨園博士は狼は「本來家畜殊に羊の強敵である。だから、牧者は自分等の家畜に危害を加へぬやうに狼を神として崇め神慮を和けるに努めるのである。これが牧畜を主なる生業とする民族の間に屢々見られる、狼神の原義である。かく狼として祭られた神が、家畜保護の神として威力をもつにいたつて、狼を殺して家畜を保護する神と仰がるるのであり、はじめ狼として消極面において畏怖した神が、狼の害を防ぐ神として積極面において尊崇されるにいたるのである」(希臘神話「八二頁」)と興味深く説明されて居る。

かくて狼は牧畜部族の守護神たるに於いて、その神たる本然の姿を示すと云つてよい。而して上掲狼祖神話を傳承する部族が、鳥孫・羌・突厥・高車・アルタイ・蒙古・ブリヤートなど、トルコ系及び蒙古系にして、何れも代表的な遊牧生活を營む諸族に限られて居ることは、右の狼神の本質より來る文化境域性を如實に語るものと云つてよく、併せてそれが狩獵性と農耕性を兼有する滿洲諸族に入つて居ないことをも興味深く感ぜられる。狼祖神話の源流が何れに發したにせよ、またそれが單源であるか複源であるかは別として、事實これが傳承され、部族の生活と機能的に結付けるものとして榮えたところは遊牧文化圏内の諸族であつて、たとへ彼等の或る者が滿洲に移り、乃至は朝鮮半島に流入したとしても、その新境域の濾過作用は彼等の狼祖神話を通過せしめなかつたのである。

次に犬である。動物學的に云へば、犬と狼とは最も近縁な動物であるが、人類生活との關係に於いては、全く對蹠的な立場にある。犬は人間に最も親まれ、人と共に在る代表的な動物であり、タスマニヤ人(Tasmanians)及びアン

ダマン人 An(dananesse) のみが犬を知らざる唯一の民族である程に、普遍的な家畜である (Forde, C.)。特殊な民族の間では、糧をひかせたり、食用として飼育したり、時には採毛用に供したりする場合もないではないが、これらは特異例であつて、最も一般的には、愛玩的飼育を別とすれば、第一には狩獵の助手として、次には家畜及びキャンブの警戒として缺く可らざる有用動物である (op. cit. p. 443)。即ち犬は、先づ狩獵生活に、次に牧畜生活に近密な關係を持つとなすことが出来るが、果して然らば上掲十一個の犬祖神話の民族的分布の事實が、このことに照應して居るであらうか。右の内四例は遊牧民たる蒙古系諸族の所傳で、狼祖神話と交錯して居り、次の三例はツングース系諸族 (元良哈、滿洲、馴鹿ツングース) の所傳にして、彼等は何れも狩獵兼牧畜、特に前者を主として營む點で蒙古族と相違して居り、こゝではそれが族祖神話の代表的なるものとなつて居る。この北方諸族に對して、南方諸族にも犬祖神話が傳承されて居り、その内徐州の蠻夷が如何なる生活形態を持つて居たかは分明でないが、槃瓠系の諸族は何れも狩獵形態を出でざるものであつた。なほ福建地方に於ける近代の採訪にかゝるものは、犬祖神話が歪曲されながらも後代社會にまで殘存して居ることを示すものである。がこの最後の例を特異例として別にすれば、犬祖神話は牧畜及び狩獵を生業とする諸族の間に榮えて居る神話にして、それが狼祖神話に比してより廣き境域性を示して居ることは、人間社會との聯關に於いて、犬との生活が狼とよりも廣きことに照應するものと云へよう。

犬祖神話を傳承する諸族を北方の滿蒙群と南方の南蠻群とに境域的に分ち得る事上述の如くであるが、この兩域が農耕的漢民族によつて南北に兩分されて居る形勢を如何に解すべきか。漢族進出以前に於ける兩境域の聯繫を想定す

することも可能であるが、固より上掲の資料程度では決定的な見解を持出すことは困難であらう。がそれにしても滿洲族間の犬祖神話(第四十九例)と福建浙江地方の犬祖神話(第五十二例、第五十三例)とが獨立した話でなく、必ずその間に要素的交流乃至は同源關係の存したであらうことは、犬が密閉された房内或は鐘の内で人態に變化するが、その中途で人々が禁忌を冒して申を窺つたが爲に、頭部のみは人に化し了らなかつたと云ふ特殊な部分が一致して居ることからも推知するに難くない。然らばこの一致は如何に説明さる可きであらうか。何れも近代の採取にかゝるものなるが故に支那文獻による輸入要素とも考へられなくはなく、滿洲の所傳が黃帝軒轅氏に拘はる話として語られて居る點などこの感を深くするのであるが、然し犬が人に化し頭のみ原もとのまゝで残つたと云ふ特定要素までが果してさう解さるべきであらうか。この點は民間傳承的であり、且又不敏な筆者は未だ支那文獻に該要素を發見するの機を得ないが故に、それが支那文獻によるものと斷言し得ないと共に、後述する如く、この神話要素が一部の女眞族が黃頭であつたと云ふ部族的特徴や頭上に長髪を残したと云ふ部族的標式と結び付いて神話されて居たことなどを考へる時、それが外來のものではなく、民族固有の文化要素であつたと考へて失當でないと思ふのである。神話要素の滿鮮と南蠻との右に類する近似關係を示す他の例として、清祖の老獺雅傳說と安南大羆越國の建設者丁部領にかゝはる同系の傳説とを指摘することが出来る。これも特殊な傳説要素に於ける南北の一致である。松本信廣氏はこの關係を論じ、それが外國種でないこと及び女が水物と婚すると云ふ條は古い傳承であるとし、「獺の様な水邊の動物が女と婚し、其子が長じて立身したと云ふ様な説話は、朝鮮滿洲地方にもまた南支、安南地方にも古來より行はれて居たものである」(「老獺

雅傳説の安南異傳「民俗學第五卷第十二號」と結論されて居る。勿論同氏は該要素が民族の古き傳承であること、及び南北の一致でふことの奥に存する根本的な問題には觸れて居ない。が犬祖神話の場合、その特殊性の大きいだけに、その歴史的聯關を豫想せしめることも強いのである。而して吾人は、兩者を結ぶリンクとしての支那文獻を發見する時までてふ條件を附して、その歴史的聯關を文獻以前の ethnological ものと推定して置きたい。

南支那及び南方諸族の間に廣く犬祖神話の分布して居ることに就いて Liu 氏は「南支那の土民の犬祖傳説」なる論文に於いて、この種神話が廣西の猿族、貴州の苗族、海南島の黎族、浙江福建の Shaka 族、臺灣のタイヤル族、琉球の宮古などに見られると云つて居る (Liu, p. 364)。同氏は浙江福建の二例以外にはそれを例示して居ない故に、その云ふところの犬祖傳説が如何なるものであり、果してこゝに如何なる程度に參考し得るものか、右以上に進んで知る由もない。が少くとも南蠻境域に於いても、北方の滿蒙境域に於けると餘り劣らない程度に、犬祖神話要素の榮えて居ることが知られ、しかもその中間に漢族が介在してこれを兩分して居ると云ふ事情が可なり明瞭になつて來たと云へよう。假りに古代漢族の豊富な文獻から、漢族自らのものとして犬祖神話が一二摘出されることがあつたとしても、固より右の分布的事實の示す大勢を否定するものではなく、従つて犬祖神話の狩獵的牧畜的な ethnological の性格を覆すものとはなり難いであらう。なほこゝに一言して置かねばならぬことは、犬は人々に親まれる動物であり且その性行爲の顯著さの故に、犬との性交を語る獵奇説話は珍らしくなく、古今説海に收められた趙人杜修己の妻薛氏の話などの文化社會人の話から、臺灣生蕃の話するものに至るまで廣く行き互つて居る話柄であるが、斯の如きは部

族生活と神祕的な結びきを持つ族祖神話とは全くその邊を異にするものであり、こゝでは問題とならない。